



2018年1月20日

JACET-Chubu Newsletter

一般社団法人 大学英語教育学会中部支部 No. 39

平成29年度中部支部大会報告 —大学英語教育の新局面：CLILと アクティブラーニングの視点から—

支部長 村田 泰美
(名城大学)

平成29年度JACET中部支部大会(第33回/2017)は愛知県及び名古屋市各教育委員会の後援を得て、2017年6月3日(土)

目次

平成29年度中部支部大会報告 村田泰美	1頁
<u>講演会報告1</u> 池田真氏「CLILによる『主体的・対話的で深い学び』」 塩澤正	3頁
<u>講演会報告2</u> 今林修氏「英文学とフィロロジーから 大学英語教育を考える」 大森裕實	4頁
<u>講演会報告3</u> 新田了氏「第二言語習得研究への複眼的 アプローチ：共通性から多様性へ」 今井隆夫	6頁
<u>講演会報告4</u> 松村昌紀氏「英語授業における経験の創出 と組織化」 藤原康弘	7頁
<u>研究会報告</u> 国際英語と異文化理解 吉川寛	9頁
<u>新刊紹介</u> 藤原康弘・仲潔・寺沢拓敬(著) 『これからの英語教育の話をしよう』 村田泰美	10頁
ああ 堀部憲夫先生!!! 田中春美	11頁
事務局より	12頁

に名城大学ナゴヤドーム前キャンパスにおいて予定通りに開催されました。このキャンパスは名城大学の第9番目の学部として開設された外国語学部が2016年度4月に単独で始動し、2017年度4月より都市情報学部と人間学部が加わることで3学部体制が完成したばかりの真新しい場所です。

大会のテーマは「大学英語教育の新局面」とし、CLILとアクティブラーニングを取り上げました。CLILもアクティブラーニングも日本の英語教育界に膾炙するようになったのは最近10年くらいのことでしょうか。どの大学でも程度の差はあれ何らかの形でこれらを導入しようという動きがあると考え、中部支部大会がその理解を図り、方法論を提示する機会となればと企画しました。CLILは内容言語統合型学習という日本語訳がありますが、言語教育教授法の一つです。学習者に目標言語で活動させることを重要視しますので、タスク活動を内包し、その結果アクティブラーニングを引き起こすこととなります。CLILと混同されがちな名称にEMI(English Medium Instruction)がありますが、その二つは区別すべきでしょう。「講義内容を英語で行う」という事象を表すEMIは原理や理論を持つわけではなく、教授法ではありません。

支部大会の特別講演にはCLIL研究および実践の第一人者のおひとりである、上智大学教授の池田真先生をお迎えし、「CLILによる『主体的・対話的で深い学び』」という題でお話頂きました。CLILの原理と教育効果を引き出すための授業設計フレームが

示されるとともに、上智大学での CLIL 授業の実践事例、および高校での CLIL の取り組みの紹介を通して日本での CLIL 授業の最前線の様子を知ることができました。またシンポジウムでは森 朋子先生(関西大学教授)が「深い理解を促すアクティブラーニングのデザイン」、石川慎一郎先生(神戸大学教授)が「CLIL, AL, and ELF: 英語教育を変える3つの視点」、筆者が「名城大学外国語学部におけるアクティブラーニングと CLIL の取り組み」と題して話題を提供しました。シンポジウムに続いては、池田先生とフロアを交えた活発なディスカッションが展開しましたが、この3名のシンポジウムは本年度刊行する『JACET 中部紀要』第15号(2017.12)に掲載されますので、参加できなかった会員の皆様はぜひそちらをご参照ください。



ところで、学会が潤滑に運営され継続されるためには、それを具体的に動かしていく役員と、役員によって実施される企画に参加する会員がいなければなりません。運営する側には学界の動向を見極め、時宜を得たテーマを取り上げていくと同時に学問を深めるという学会の使命を忘れないことが求められますが、大学全入時代と騒がれた時を経て、その高尚なる使命について最

近考えることがあります。大学では必修の単位を取るだけの目的で英語を履修する学生を相手にする場合のほうが多いのではないかと、であるならばそのような学生に対する大学英語教育という問題も、学会で扱うテーマになり得るのではないかとということです。レメディアルという冠がついた研究が多く見られた時期もありましたが、諦観の域に達したのか、最近はあまり見なくなりました。

少し話が大きくなりますが、この問題はおそらく英語教育に携わる教員の *dignity* に係ってくるのではないかと考えています。Kazuo Ishiguro の *Remains of the Day* には *butler* である主人公が *dignity* について語る部分にたくさんのページが割かれています。日本語では「矜持」がその単語に近い意味を表すと思いますが、Ishiguro のいう *dignity* は *Brave New World* を著した Aldous Huxley の次の言葉に通じるものがあります。曰く、*There's only one corner of the universe you can be certain of improving, and that's your own self.* つまり前進とは日々(学生と対峙する過程で)己を磨いていくことでしか達成できない、すなわち己に対する刻苦勉励を通してのみ、改善が可能であるという意味だと解釈できます。自分自身を高めなければ *dignity* は持ち得ない、それをせずに *dignity* だけを求めるのはもとより偽りでしかないということです。よりよい英語教育を求めて研究者、あるいは教員として精進することが自分自身に対して持つ *dignity* に繋がっていくとすれば、学会が一人ひとりの会員の *dignity* を確認できる場でありたいと思った次第です。会員の皆様のご意見を伺いたいと願いながら、報告と致します。

講演会報告 1


第 33 回 (平成 29 年度) 中部支部大会
「CLIL による『主体的・対話的で
深い学び』」
池田 真 氏
(上智大学教授)
2017 年 6 月 3 日
(於: 名城大学)

CLIL (Content and Language Integrated Learning) の領域で、日本での第一人者ともいえる上智大学の池田真先生をお呼びして、「CLIL による『主体的・対話的で深い学び』」というタイトルでその理論と実践に関してご講演をいただいた。「内容言語統合型学習 (CLIL)」とは、CBI (Content Based Instruction) と同義とも取れるが、CLIL は内容はもちろん、「思考力」育成や「共同 (協働) 学習」を促すと言う意味で、「深い学び」が伴う可能性があり、最近の教育のバズワードでもあるアクティブ・ラーニングにも近いものがあると言う。学習者が内容にのめり込むことにより、言語学習がより「有意味」になり言語習得が進むという原理は容易に想像できるが、池田氏は CLIL で学習することにより、学習者の「宣言的知識」が「手続き的知識」に、「言語知識」が「言語技術」に、「低次元思考力」が「高次元思

考力」に、「共同学習」が「国際意識」に変わると言語学習以上の意味があると言う。CLIL での言語活動が生み出す別の次元の重要な能力も身に着くという可能性を強調された。これが氏が言う「主体的・対話的で深い学び」という意味だろう。



CLIL は必然的に、interaction, dialogic, task, language use, authentic, in context, scaffolding, cognition, high-order thinking skills, language activationなどを伴う (そうしなければ、単なる外国語による講義になり、普通の外国語学習者についてはいけない?) とする。これを池田氏は「CLIL による汎用能力育成」と表現した。面白いのは、学習を最大化にするためには、母語の介入さえも「あり」とするという発想が必要ということである。CLIL 的英語学習により英語運用能力以外に、「論理的思考」、「知識獲得力」、「意識疎通意欲」などが習得されるが、その次にさ

		成美堂 2018 年新刊のご案内		〒101-0052 東京都千代田区神田小川町 3-22 TEL 03-3291-2261 / FAX 03-3293-5490	
New Connection Book 1	2,200 円(税別)	SUCCESSFUL STEPS FOR THE TOEIC® L&R TEST			
New Connection Book 2	2,200 円(税別)	A Topic-based Approach -New Edition- 2,000 円(税別)			
Break Away 2	1,900 円(税別)	QUICK MASTERY OF THE TOEIC® LISTENING TEST			
Reading Success 3	2,000 円(税別)	1,300 円(税別)			
Britain at a Watershed	1,900 円(税別)	AFP World News Report 4 2,500 円(税別)			
Science in Our Daily Life	1,900 円(税別)	Winning Presentations 2,500 円(税別)			
Trend Watching 2	1,900 円(税別)	Meet the World 2018 -English through Newspapers- 2,000 円(税別)			
Good Reading, Better Grammar	1,900 円(税別)	Understanding Our New Challenges 1,900 円(税別)			
PERFECT PRACTICE FOR THE TOEIC® L&R TEST		English for Student Pharmacists 1 2,800 円(税別)			
-Revised Edition-	2,200 円(税別)				
START-UP COURSE FOR THE TOEIC® L&R TEST					
-Revised Edition-	2,000 円(税別)				
		株式会社 成美堂 SEIBIDO			
		●書籍の情報はホームページでもご覧になれます。			
		URL: http://www.seibido.co.jp e-mail: seibido@seibido.co.jp			

らに人間が生きていくために重要な「批判的思考力」、「問題解決力」、「メタ学習力」、「革新想像力」、ひいては、社会的な能力である「協調協働力」、「国際責任力」なども養われるという。これは文部科学省が 21 世紀型人間の持つべき能力として、次の指導要領で声高に強調して入る能力とまさに一致している。文科省が CLIL を非常に重要な英語教育方法の一つとして推進している理由もこの辺にあるのかもしれない。コミュニケーションアプローチの次にくる「第 3 の英語教育革命」が CLIL になるかもしれないと G. クックの言葉を引用された。

後半は CLIL を活用した授業展開例を紹介して下さった。例えば、中学の教科書で名画についての読み物があれば、そこからネット上の An art evaluation: how to appreciate art などという文章を探し、教員がシンプルに書き換えた上で、それを学習者が読んだ後、実際に名画を評価する（言語、内容、思考）活動をグループで行い、英語で議論する。その後、なぜそのような評価になったかを紹介文などを書いて、さらに口頭で発表する。この一連の作業が上記のような 21 世紀型の人間の持つべき能力の養成に繋がるという原理である。教員の負担は大きいですが、一度始めると教員の授業スタイルもアクティブに変わらざるをえない。実は、教員の意識と教育スタイルの改革こそが、この CLIL がもたらす最大の効果であり、文科省が狙っている「本丸」ではないか、という発言で池田氏の講演は終わった。今後、CLIL の視点や教授法を取り入れた授業は日本の大学ではますます多くなると思われる。その意味でも有益で示唆に富む大変刺激的な講演であった。

塩澤 正 (中部大学)

講演会報告 2

2017 年度中部部秋季定例研究会

「英文学とフィロロジから
大学英語教育を考える」

今林 修 氏

(広島大学教授)

2017 年 10 月 21 日

(於：中部大学)

JACET 中部支部 2017 年度秋季定例研究会の講演講師として招聘した ^{いまはやしおさむ} 今林 修 教授は、故山本忠雄博士(ディケンズの言語研究)に代表される広島大学の伝統的系譜ともいべき文体論 (Stylistics) 研究の継承者であると同時に、新たな文体論の可能性を探究する一環として、英語教育にその知見を活かすことを精力的に試みている眞のフィロロジストである。フィロロジを文献学というよりは「言語文化学」であると断じたのは、私の辞書学の恩師、故永嶋大典教授であったが、書かれた過去の遺産に生命を吹き込む学問だと言ってよい。文体論が言語学と文学研究の境界領域に位置する両者の架け橋であり、ラングというよりはパロールを問題にする点から判断すると、英文読解や英作文といった英語教育と相性がよく、それに活力を与えることができるとの期待を抱かせる研究分野である。事実、今林氏はこの三年、日本英文学会の英語教育部

子どもとはじめる英語発音とフォニックス

●山見由紀子/赤塚麻里/久保田一充●

英語教師を目指す学生の必読書

小・中学校の英語教育で導入され注目を集めているフォニックスを見やすく、わかりやすく説明した一冊です。音声学の観点からの説明と、付属の音声、動画(無料ダウンロード)で学習者自身の発音改善が期待できます。



B5判(100) CD付 定価(本体2200円+税) 978-4-523-26555-9



株式会社 南雲堂

〒162-0801 東京都新宿区山吹町 361
TEL: 03-3268-2311 / FAX: 03-3268-2486
E-mail: nanundo@post.email.ne.jp

門シンポジウムを企てられてきた。特に、第 87 回大会 (2016) の「文体論に基づく英語教育再興」は豊田昌倫京都大学名誉教授の賛同を得て実施され、その成果は『英語のスタイル—教えるための文体論入門』(研究社, 2017) に結実している。

本講演は、シェイクスピア作『ロミオとジュリエット』の一節から始まった。映画化された台詞の解釈も視野に含めて、an artificial night (わざとらしく装った夜) という単語について、朝帰りした学生時代の実生活から共感を覚える形で理解できたことは、文学作品を「読む」ということの楽しさを示す卓近な例である。さらに一時代遡って、チャーサー作『カンタベリー物語』の「総序: 騎士の話」に話題は及び、最近の文学研究のキーワード「ジェンダー」の側面から見直してみると、騎士の徳目について記述された箇所—he loved chivalrie, trouthe and honour, fredom and curteisie も従来とは解釈が異なってくるという。また、オバマ大統領のスピーチの用例では、“I Like Ike (Eisenhower)”という統合的関係(syntagmatic)要素は、語彙選択における系列的関係(paradigmatic)要素に左右されることを指摘する(この場合は踏韻を重視)。さらに、一連の文章表現を並置関係や均衡関係といった文体論的視点から眺めてみると、なぜそのよう

な文章が産出されているのかを理解し、より深く作者の意図を汲み取ることができる—そのためには、交錯配列法 (Chiasmus) に留意して味読する必要がある。カイアズマスとはお互いに関連する 2 つの節について、その構造を反転させる修辞法 (Rhetoric/人を説得するための術 art) のことであり、そこに価値観の転倒が現出する。冒頭に引用した *The Tragedy of Romeo and Juliet* の締め括りの部分も“For never was a story of more woe than this of Juliet and her Romeo”とカイアズマスが使われ、また、音声的にも暗い響きの後母音が多用され、悲劇的結末の情感を増強しているといえる。『英語のスタイル』(2017)でも例示したカール作『はらぺこあおむし』(*The Very Hungry Caterpillar*)の文体、ディケンズ作『クリスマス・キャロル』における Americanism 語彙の使用、オースティン『高慢と偏見』における -ing 形使用の意図(これはマクドナルドのキャッチフレーズ i'm lovin' it でも同じ文法意識)など内容が多岐にわたり、蒙を啓くことこの上ない英文解釈の精髓が込められていた。こうした授業なら、大学の教養教育における「英米文学講読」が批判の対象となり、誤解を受け、絶滅危惧種になることはなかったらうにと悔やまれた。

ソシュール以来の言語観に基づき、言語学

<p>史上最悪の英語政策 ウソだらけの「4技能」看板</p> <p>史上最悪</p> <p>LISTENING READING WRITING SPEAKING</p> <p>阿部公彦</p>	<p>史上最悪の英語政策 ウソだらけの「4技能」看板</p> <p>阿部公彦著 定価 1,300円+税</p> <p>2017年7月「大学入試の英語が4技能」とのニュースがメディアに流れた。2020年度から大学英語入試が変わる。試験が「業者丸投げ」となり英語教育は大混乱! この「改革」の問題点と対応策を考える。</p>	<p>Sounding Natural in English Yamane Kathleen 著 予価 1,900円 近刊 ちょっとまじめに英語を学ぶシリーズ2「Native Speaker にちょっと気になる日本人の英語」の大学生向けの英語テキスト。</p> <p>Critical Reading through Collaborative Learning 館岡洋子監修 津田ひろみ、小松千明、大須賀直子、Alison Stewart 著 予価 2,200円 近刊 学習者同士の協働学習で学ぶ英語リーディングのテキスト。各章にはさまざまなメディアから厳選した英文記事を収録。全4ユニット構成。</p>
<p>■ひつじ書房の刊行案内や特別セールなどのお知らせは「ひつじメール選信」から配信いたしております。ご希望の方は toiawase@hituzi.co.jp までメールでご連絡ください。 〒112-0011 東京都文京区千石2-1-2大和ビル2F ひつじ書房 TEL 03-5319-4916 FAX 03-5319-4917 toiawase@hituzi.co.jp http://www.hituzi.co.jp/</p>		

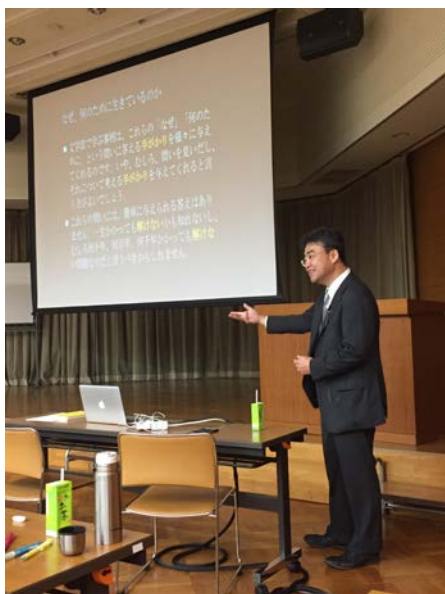


ひつじ書房

はラング研究を旨とし、文学研究(文学の言語や文体研究)がパロール研究を旨とするとなると、その両者の隔たりは大きい。実際、20世紀の新批評理論に代表されるような文学研究では、その壁を乗り越えられなかった。しかし、前述したように、新しい文体論(書き言葉に加えて、Phono-stylistics といった話し言葉も射程に含まれる)にその両者の架け橋となる可能性が窺える現在、その応用的側面としての英語教育への貢献が期待される。それこそフィロロジの本質的かつ究極の目的ではなかったか (<Gk. *philologia* [philo'love' + logos 'language/learning'])。

今林氏は講演の最後に、かつて芥川龍之介が市河三喜(科学的英語学研究の祖)を揶揄して「市河流の分析的な英語の読み方では作品が少しも面白くない」ことを指摘した事実を自虐的に引用しながら、最終的には英詩の父チョーサーの言葉「楽しく学んで、楽しく教える」に帰るのが一番であると締め括ったが、本稿筆者には同じくチョーサーの名言“Nothing ventured, Nothing gained”に響いた。新しい文体論の発展が英語教育の新局面を拓くことを期待したい。

大森 裕實 (愛知県立大学)



講演会報告 3

2017 年度中部支部講演会

「第二言語習得研究への複眼的
アプローチ：共通性から多様性へ」

新田 了 氏

(名古屋学院大学准教授)

2017 年 12 月 9 日

(於：中京大学)

2017 年度中部支部講演会では、「第二言語習得研究の今」をテーマに2つの講演が行われた。その1つが、新多了先生による講演であった。新田先生は昨年、馬場今日子・新多 了(2016)『はじめての第二言語習得論講義—英語学習への複眼的アプローチ』を大修館書店より出された。ご講演は次のお話から始まった。ご自身が留学先で博士論文のテーマとして研究してこられた手法—第二言語習得論を当時牽引してきた認知的アプローチ (Chomsky の生成文法理論の影響を強く受けているアプローチ) —を日本に持ち帰り、日本の大学で実践したが、英語を教え始めたとき、英語学習が成功するかどうかの要因として、「認知能力」以外の影響があるのではないかという思いに至り、日本の英語教育環境における認知的アプローチの限界を感じたことで、それまでやってこられたことを捨て、新たな研究を始められたという意味で、一つの転機を迎えられた。

新多先生の研究の転換とも重なり、第二言語習得論研究も、大きな転換期を迎えた。1996 年のファースとワグナーの論文を機に、Social Turn と呼ばれる大きな転換を迎え、要素還元主義の立場に立つ認知的アプローチだけでは外国語学習を扱うことには限界があるという考えから、人の持つ認知能力だけでなく、社会的・環境的側面も考

えていく多様なアプローチが出現し、現在では、認知的アプローチがまだ主流ではあるものの、多様なアプローチが共存する時代を迎えているというお話があった。Ortega の言う epistemological diversity の時代である。つまり、多様な考えや価値観の存在を認めるという考え方になっている。このような第二言語習得論の背景の中で、新多先生は、タスクに基づく外国語教授を複雑系理論 (Task-based Language Teaching from the perspective of Complex Dynamic System) に基づいて研究されている。

世界の様々な現象は複雑系理論に基づくと言えます。天気、株価などは様々な要因の影響を受けて決まります。また、教室での学習や SLA も複雑系です。複雑系理論では、従来の認知的アプローチのようにあるタスクを行い、その効果をプレテストとポストテストのような事前と事後で上がったかどうかを線的発達で見るという方法と違い、同じように発達していても、その過程はどのようになっているかという質的な違いまで、非線的発達として見るというものです。具体例として、次の Research Questions による研究が行われていることにも触れられました。1. ライティングタスクを一年間くり返し実施した場合、ライティング能力はどのように発達するのか？2. 自己調整プロセスはライティングの発達にどのような影響を与えるのか？そして、これらの研究の手法として、従来の「共通性」に焦点を当てた、どのようなタスクを与えればどのようなパフォーマンスが得られるかという認知的なアプローチではなく、学習者の学習に影響を与えるのは、どのようなタスクを与えるかではなく、学習者がどのようなアフォーダンスをタスクから知覚するかが重要である (cf. Larsen-Freeman

(2017)) という立場を取られているというお話でした。

英語学習が成功するかどうかは、教授法や学習法による影響のみでなく、教授法や学習法を学習者がどのように捉えるか、つまり、どのようなアフォーダンスを知覚するかという点は非常に重要な点だと私も考えます。外国語教育、第二言語習得の分野も、すべての学習者に最適なアプローチの追求という「共通性」の時代から、個々の学習者に最適なアプローチは何か、それを決める質的な要因は何かを探る「多様性」の時代に来ているのではないかと感じる次第です。

今井 隆夫 (愛知教育大学 [非])



講演会報告 4

2017 年度中部支部講演会
「英語授業における経験の創出と
組織化」

松村 昌紀 氏
(名城大学教授)

2017 年 12 月 9 日
(於 中京大学)

2017 年度中部支部講演会は、「第二言語習得研究の今」をテーマとし、新多 了先生、松村昌紀先生による 2 つの講演が行われた。

松村氏は『タスクを活用した英語授業のデザイン (英語教育 21 世紀叢書)』(2012、単著)、『タスク・ベースの英語指導—TBLT の理解と実践』(2017、共著、共に大修館書店) などのご著書をお持ちで、SLA 研究、とくに「タスク」の専門家として広く知られている。

本講演は、まず氏の研究上の関心事とタスク実践のご経験のお話から始まった。氏は「言語はどんな環境的条件のもとで、何が直接的、間接的な引き金になって発達していくのか」をマクロな関心事として、具体的には教室で言語使用の機会を提供し、習得の引き金となる「課題」＝「タスク」の研究を続けてこられた。その関心と専門的知見を持ち、さまざまな教室でタスク実践を行われてきた優れた実践家でもある。

以降、本講演を 2 つの部分に分けてまとめる。前半部分は、タスクやタスク・ベースのプログラムの概要であり、後半部分は研究と実践を通じての氏の主張である。

まず前半部分のはじめに、タスクの定義とその同定や分類の複雑さについてお話があった。タスクの定義は、氏によれば、「学習者が必要に応じて工夫・判断して表出したり、与えられた情報を分析したりしなければ、絶対に成果を上げることができないように構成された、目標志向的な課題」である。この詳細な定義においても、何を「分

析」、「成果」、「目標志向的」と捉えるかで、判断にゆれはあるだろう。そのような判断を、具体例を示されつつ、分かりやすくご説明されていた。その後、Robinson (2015)、松村 (2017) の研究成果を示しつつ、タスクの分類に関わるさまざまな要素を示された。

次にタスクの具体例(結婚相談所として、5 人の結婚相手候補をランク付けする等)を示され、どのようなタスク・デザインが望まれるかについてご説明があった。4 技能のバランスと思考プロセスの多様性に配慮がなされたタスクを提案された。

その後、タスク・ベースのカリキュラムを考える上での視点として、学習者のニーズ・ベースか、「できること (CAN DO)」ベースの 2 つをご紹介された。いずれにせよ、学習者の状況と指導の目的に応じ、認知プロセスの階層(よく知られた「ブルームの分類)などを考慮して、タスクを配列することの重要性が示された。

後半部分では、研究と実践に裏打ちされた氏のタスクに対する主張がなされた。まず氏は、「タスク」という用語が、本来の意味を離れて使用されていることに警鐘を鳴らされた。タスクとは、本来的には、事前に形式の指導をせず、特定の言語項目の利用を強要せず、またその言語使用の正確さのみに焦点を当てるものではない。基本的

We Love L.A.!

L.A. イングリッシュ・ライフ～映像で学ぶ大学基礎英語～
Robert Hickling・白倉美里 著 / Todd Ruczynski 映像制作

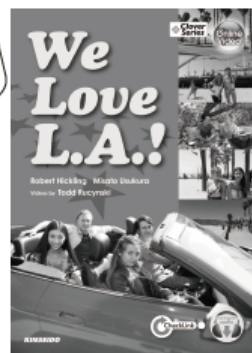
リメディアルの人気著者、ロバート・ヒックリング初の映像教材！
L.A. ロケの映像と充実の内容で使いやすさがさらに UP !!

- L.A. ロケによる明るい陽光とさわやかな風を感じながら、主人公ユウから 4 人の若者の日常生活を通して、やさしい英語を楽しく学びます。
- リメディアル教材としての従来の使いやすさに加え、画面上の人物とのスピーキング練習やスライドショー形式の L.A. 案内など、映像教材ならではのアクティビティも充実。
- メインの会話の他にも、文法、リーディング、ライティングなど、バランスのとれた定評のある構成で英語の基礎を固めます。

K **金星堂**
KINSEIDO

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 3-21
TEL 03 (3263) 3828 / FAX 03 (3263) 0716
e-mail: text@kinsei-do.co.jp URL: http://www.kinsei-do.co.jp

ストリーミング動画で
いつでもどこでも
予習復習



¥2,500(税抜)、B5判、104pp、全15章、教室用CD・DVDあり

に学習者中心の活動を行い、言語形式は必要であれば後に教えるものである。学習者の力を信じて、能力を伸ばす機会を与え続ける指導といってもよい。しかしながら、タスクの研究者間でも、その用語の使用に「ゆらぎ」が見えるようである。

また今でもまだ見受けられる形式を過度に重視した指導や評価の体制に、あらためて疑問を呈されていた。英語の間違いだらけのエッセイでも、何かのメッセージを伝えることができる以上、0点ではない。生徒たちはたしかに英語の力を持っているのである。氏は強く訴える：「英語を使って成果を上げることができるのに、その力をゼロ評価することがどうしてできるのか。」

本講演をとおして、強く感じられるのは「タスク」の領域の奥深さである。過去に英語教育学の領域は（実際には教科に関わらず、同様の傾向があったそうだが）、文学や言語学などの内容学の学者が片手間に行っていた時代があったそうだ。その歴史からか、英語教育学全般を「浅い」と捉えるような風潮が確かにあった。とくに高尚な文章を、頭の中で咀嚼する文学関係者からは、ペアやグループでの間違い探しなどの活動は「浅く」みえたことであろう。

しかしながら、学習者の知識、能力、意欲を考慮し、前述の松村（2017）に示されたさまざまな要因をコントロールしながら、どのようなタスクをデザインするか、またその効果をどのように検証するかは、大変奥深い研究領域である。講演タイトルにあるように、人間の経験をいかに創出するか、いかに組織化するか、やはり深い。

児童、生徒、学生はいつかは教室をはなれる。そして実際に英語を使用して、何らかの「タスク」を達成していかなければならない。氏が新共著で指摘するように、「教

室の中のゴール」に終始するのではなく、教室を超えた場で機能する英語使用者の育成を目指すのであれば、タスク・ベースの英語指導は、今後一層着目すべき指導法であろう。

藤原 康弘（名城大学）



研究会報告

国際英語と異文化理解

SIG on World Englishes and Cross-cultural Understanding

「国際英語と異文化理解」研究会は国際英語論と異文化理解の視点から英語教育のあり方を考える研究会であり、現在の主たる研究活動は科学研究費基盤研究（C）「国際英語論に基づくアプローチの有効性—英語学習者の心的障害克服の実証」（平成27年度～29年度）をめぐって行われている。科研費助成研究に関して各人が研究分担に沿った研究を進める他、それぞれが国際英語に関する個人研究も実施している。

研究会員は例年IAWE学会やELF学会に参加し、研究発表を行うと共に、国際英語論研究の最新動向の把握に努めている。2017年6月のIAWE世界大会（於：シラキユース大学）では、小宮富子、塩澤 正、倉橋洋子、吉川 寛がそれぞれ日本人英語に関

しての研究発表を行った。

2016年の6月には当研究会の目標の一つである著書『「国際英語論」で変わる日本の英語教育』をくろしお出版から出版することが出来た。塩沢が第2章「今、なぜ国際英語論の視点が必要か」と第3章「国際英語に基づく英語教育の実践―何をどのように教えるのか―」を、吉川が第1章「国際英語とは」と第6章「日本人英語の意味」を、倉橋が「日本人の非言語コミュニケーションと行動様式―国際英語の視点から―」を、小宮が「日本人英語の文法」を、下内 充が「日本人英語の発音・意味」を執筆した。

研究会の今後の活動としては、新たな著書の共同執筆を進めたいと考えている。また、引き続き競争的研究資金の獲得に努力し、研究会としての研究環境を整え着実な研究活動を進めて行きたいと考えている。

吉川 寛 (中京大学)

新刊紹介

藤原康弘・仲 潔・寺沢拓敬 著

『これからの英語教育の話をしよう』

ひつじ書房 2017年8月発行



本書は研究書である。矛盾した言い方かもしれないが、「義憤に満ちた」研究書である。研究書であるというのは著者らの主張が客観的な知見を根拠に基づいて導き出されているからであり、義憤は言語学や英語教育の研究知見を知悉している著者らが、小・中・高の教育現場を把握していることから起きてくる。2017年3月文部科学省は次期学習指導要領と英語教員養成・研修のコア・カリキュラムを発表した。著者らはその内容を正確に把握し分析した上で、本書ではそれを批判的に読み解きながら、建設的な対案を提示している。

新進気鋭の3人の研究者がそれぞれに異なった視点から日本の英語教育政策の問題点をあぶりだしていく構成で、取り上げられるテーマは「小学校英語改革」、「国際英語からみた英語教育」、そして「コミュニケーション教育」である。寺沢は2020年度から教科に格上げされる小学校の英語について、教科化の根拠が見いだされないこと、議論不足であること、教科化による教育効果について述べる。適切な予算措置が伴っていないことなど、小学校英語教科化には政策上の問題点が多くあるが、最も説得力のある議論は小学校英語教育化による学習時間の確保という現実的な問題であろう。寺沢の計算では教科化によって増えるのは105時間であり、中高の授業時間を合わせても英語学習時間は800時間程度にしかならず、日本語母語話者にとって言語距離の遠い英語習得にはその倍以上の時間が必要であることを考えると、学習効果に大きな疑問符がつくという。

藤原はコア・カリキュラムには「国際共通語としての英語」という文言が提示され、その理念の導入は日本の英語教育史上の大きな変化であるとして評価する。しかしな

がら、英語の教科書の現状として付属音声のその 96%が内円圏の英語母語話者によるものであること、また現場の教員の約 90%が「自分を日本語英語の話者」だと見なし、自らの英語を否定的に捉えていることから、「国際共通語としての英語」の導入の課題を論じた。また「国際共通語としての英語」を基本とする英語教育に関して必ず議論される「評価の方法」や「評価基準」についても提案がなされており、現実的な方向性が具体的に示されている。

「CAN-DO」リストを打ち出そうとした新学習指導要領にかなり期待していたと述べる仲は、発表されたものがどのように期待外れであったかを、観点毎に丁寧に論じた。しかし、彼の一番の失望は文科省の「抜本的改革の本気度」に全て帰する。本気で英語教育を改革する気なら、法整備と投資を実行し、外国語教育の多様化（CAN-DOはCEFRを基にしているのであり、英語一辺倒は矛盾する）とコミュニケーション能力観の変革（「目的達成」のためのコミュニケーションでなく、「人間関係形成」も取り入れる）に向き合うべきと主張する。

日本の英語教育の将来を真剣に考え、これからの世代に本当に資する英語能力涵養のためには何を指針とすべきか、それをどのように施行できるかを探すための必読の一冊である。

村田 泰美（名城大学）

ああ 堀部憲夫先生！！

中部支部創設以来、ずっと長い間 JACET の評議員をなさってくださっていた南山大学短期大学の堀部憲夫先生が、昨年 10 月 18 日に亡くなられたという、悲しい知ら

せが年の暮れに舞い込んだ。中部支部大会や研究会にもよく来られ、静かに聞いておられたお姿は、多くの方の記憶に残っているはずである。

個人的なことで申し訳ないが、先生は私がピアノを弾くアンサンブルの夏の音楽会にも、ヴァイオリニストの奥様とご一緒によくおいでくださった。あのお姿はもう 2 度と見られないかと思うと、残念でならない。堀部先生、どうか安らかにお眠りください！

最後に、たまたま本日、以前はじめて静岡で支部大会を開いた時に大変お世話になった畏友船城道雄先生一元静岡大学教授、オハイオ州立大学の恩師フィルモア教授の著作を私と共訳(三省堂、1975 年)―が昨年の 2 月 16 日に亡くなっていたと、ご次男から連絡があったことを付け加えておきたい。

田中 春美（南山大学名誉教授）

掲示板

『JACET 中部支部紀要』第 16 号に掲載用の原稿（学術論文、研究ノート、実践報告、書評）を募集します。ぜひ奮ってご応募ください。

締切： 2018 年 9 月 10 日

刊行予定： 2018 年 12 月末

掲載料：刷り上がり 1 ページにつき、
1,000 円の負担

長さ： 研究論文 23 ページ以内、実践
報告・研究ノート 15 ページ以
内、書評 5 ページ以内

問合せ： JACET 中部支部事務局

投稿規程など詳細は、ホームページや
紀要最終ページでご確認ください。

中部支部紀要編集委員会

事務局より

◆ 2017 年度春季定例研究会のお知らせ
2017 年度春季定例研究会を 2018 年 3 月 3 日（土）に南山大学 名古屋キャンパスで行います。詳細は同封のプログラム、および JACET 中部支部ホームページをご覧ください。

◆ 新入会員のご紹介
2017 年 6 月から 2017 年 11 月までの中部支部 所属新入会員は以下の方々です。

(敬称略、入会順)

デイキンソン ポール (名城大学)

Laurence, David (中部大学)

McClellan, Gerry (Teachet)

幸田明子 (常葉大学)

スミス フレイザー

(University of Warwick [院])

足立 望 (岐阜聖徳学園大学)

小田節子 (金城学院大学)

Duff, Nicholas (金沢工業大学)

柴田直哉 (名古屋外国語大学[非])

◆ 2017 年度第 2 回支部総会報告
12 月 9 日に開催された第 2 回 JACET 中部支部総会で 2018 年度事業計画及び予算案・人事案が了承されました。

◆ 2018 年度 JACET 国際大会ご案内
第 57 回 (2018 年度) 国際大会は 2018 年 8 月 28 日 (火) ~30 日 (木) に東北学院大学 土樋キャンパス (宮城県仙台市) にて開催されます。

大会テーマ :

「グローバル化に向けた初等英語教育から
高等英語教育までの学習成果の質保証」
Assuring Quality Learning Outcomes in
Primary to Tertiary English Education for
Globalization

詳細は JACET 大会ホームページをご覧ください。

◆住所変更届提出のお願い

支部会員みなさまに、紀要やニューズレターなどの郵便物をお届けできない事例が増えています。お手数ですが、転居の際には、JACET 本部事務局と中部支部事務局の両方に、住所変更届をご提出ください。

◆ニューズレターは会員の皆様のフォーラムです。ご意見、ご要望等は事務局までメールでお送りください。投稿も歓迎いたします。

JACET 中部支部事務局

〒461-8534 名古屋市東区矢田南 4-102-9

名城大学外国語学部 藤原康弘研究室内

E-mail: fujiwara@meijo-u.ac.jp



JACET-Chubu Newsletter No. 39

2018 年 1 月 20 日発行

発行者：一般社団法人 大学英語教育学会

中部支部 (代表) 村田泰美

編集者：藤原康弘 佐藤雄大 北尾泰幸